VOICE.12

# ONE'S voice

野田秀樹 × アイタイヒト

森山未來

野田秀樹

岩井秀人

## 予測不能な子供のひらめきを原作に、ハイバイ岩井と森山未來が舞台づくりに挑む！

子供が考えたお話を、創作の最前線にいるプロの劇作家や演出家や俳優が、力を合わせてひとつの作品にし、それを幅広い層の観客が楽しむ――。2009年の芸術監督就任時、野田秀樹が目標のひとつに掲げた“変化球”の児童演劇づくりに、何とも贅沢なふたりが名乗りを上げた。人気劇団ハイバイの作・演出家・俳優の岩井秀人と、彼の誘いに応じた俳優でダンサーの森山未來。2017年2月の上演に向けて、大の大人が子供に振り回されるプロジェクトがスタートを切った。



### 「そのアイデア、もらっていいですか？」

岩井　野田さんの「子供が書いた脚本を、大人が演劇にする」というアイデアを聞いた時から、絶対におもしろそうだと思ったんですよ。でも当然、それは（言い出した）野田さんがやるんだろうから、早く観たいなと思っていたけど、何年経ってもなかなか話が聞こえてこない。お会いした時に「いつやるんですか？」と聞いたら、「忙しくてできないんだよ」と。だったらやらせてもらいたいと思って、すぐその場で「そのアイデア、もらっていいですか？」と言って許可をもらえたんですよね。

森山　3年ぐらい前だったかな、KAAT（神奈川芸術劇場）に岩井さんの舞台を観に行って、そのあと初めて食事をしたら、次の日に「子供の芝居をつくりたいんだけど、興味はないですか？」とメッセージをもらったんです。白状すると、話した時は酔っぱらっていて、どんな会話をしたのかあまり詳しく憶えていなかった（笑）。でも何となく、（1年間留学していた）イスラエルのチルドレンショーのイメージが頭に残っていて、ということは話したんだろうし、確かにおもしろそうだと感じて「やりましょう」と。最初は野田さんからのアイデアだったんですね。野田さんがそういうものをつくりたいと思ったのは、何かきっかけがあったのですか？

野田　以前、ロンドンで友達がそういう芝居に出ていたんだよ。子供が書いた話を成立させるために、何人もの大人の役者が奮闘するという趣向で、すごくおもしろかったんだよね。言ってみれば子供のひらめきに、プロの役者が寄ってたかって悪戦苦闘しているわけ（笑）。それを子供限定ではなく、普通に幅広いお客さんに見せていて、役者達も必死でね。「こういう芝居は日本にはないな、あればいいのにな」と思ったことがずっと頭に残っていて。でももちろん、簡単につくれるものではないとわかっていたから、そう気軽に手を出すことができなかった。

岩井　それで長いこと、そのままになっていたんですね。

野田　子供から出てきたアイデアは、いじるのが難しいでしょ？　どんなにおもしろくてもそのままでは（演劇作品として）外に出せないし、下手に大人が手を入れればすぐにつまらなくなる。そこのさじ加減をどうするかが命綱で、ものすごくセンスを問われるよね。

森山　野田さんがロンドンでご覧になった作品は、演出は誰が？

野田　演出家は置かず、役者が相談しながらつくっていたね。短い話4本か5本のオムニバスだった。何人ぐらいの子供の話をつなげたかはわからないけど。

岩井　やっぱり短いものを何本かつくる形になるのかな。1時間半の1本の物語をつくるのは難しいでしょうね。無理にまとめようとしたらいくらでもまとめられるけど、大人の考えを持ち込んだら、せっかくおもしろかった部分が削られてしまう。子供から出てきたものにはなるべく手を加えないようにしようと思っています。台本の段階で削ってしまうことはできるだけしたくない。

### 小学生とのワークショップでわかったこと

野田　準備のためにワークショップをしたと聞いたけど。対象は？

岩井　基本的に小学生ですね。未來くんも途中から顔を出してくれました。

野田　どうだった？

森山　楽しかったですよ。岩井さんが上手いんです、子供から話を聞き出すのが。

岩井　特に頑張らなくても、子供と（精神的に）横並びになれるので、向こうもきっと話がしやすいんですよ。教えるというよりは、みんなに「（アイデアを）ちょうだい、ちょうだい」という感じでやっているので。だからまぁ、一緒に遊

んでいるんですね。

森山　いや、あれはなかなかできないです。

野田　どんなふうに進めているの？

岩井　たとえば、ある子とうまく話が通じないと、ちょっと強引に困って見せて「え、なに？　なんて言ったら通じるの？」と言葉にしちゃうんです。この間は頭の良い子がひとりいて、僕らの会話を聞いて「ああ」ってわかった顔をしていたから、「え、わかったんだったらみんなに教えてよ」ってなことを言いながらやりました。でも子供が考えるお話って、すぐに誰か死にません？　男の子も女の子もみんなそう。「誰々が何々してたらね、死んじゃうの。あーっ！」という感じでひっきりなしに、もう次から次へと死ぬ死ぬ（笑）。

野田　あはは！　でももしかしたら、登場人物がすぐに死ぬのは日本人の特徴かもよ？

岩井　ああ、アニメの影響とか？

森山　地域もあるんじゃないですか、都会ほどそういう傾向が強いとか。それと子供って、最初に誰かが「死んだ」と言ってみんなが笑ったら、次の子も「死ぬ」と言ってウケたがる（笑）。

野田　大人の役者が脱ぎたがるのと一緒だな（笑）。ほら、いるでしょ？　稽古場で困ると、演出家が頼みもしないのにTシャツを脱ぎ出す人が。

森山　え、エチュードをやっている時とかにですか？

野田　うん。何も浮かばなくなって困ると。結構いるよ。

岩井　僕のところではいないですけど？

野田　世代によるのかな……。

森山　さっきの「次々死ぬ」という話、僕は後ろで観ていておもしろかったんですよ。岩井さんが子供から出てきた話をホワイトボードにどんどん書いていって「こういう人がいるんだね、そしたら次にこの人はどうなる？」と質問する。すると死んじゃうんですけど「うん、死ぬのはわかった。じゃあ、もし死なないならどうなる？」と、もうひとつ流れをつくろうとする。で、ゆくゆくはやっぱり死んじゃうんですけど（笑）。そうやって分かれていく枝をなんとかして繋ごうとしては、やっぱり分かれていく。その絵がすごく印象的でした。あれは、死ぬということがどういうことかを何となく示していたように感じたし。

岩井　あれだけ子供から（登場人物が死ぬという話が）出るということは、それを拾わないのはこの企画的にも嘘になるしね。

野田　ワークショップはもう何回かやったの？

岩井　まだ1回だけです。最初のを、たまたまスケジュールが空いていて未來くんにも見てもらえたんですけど、今後の（共同作業の）ためにはすごくよかった。

森山　僕も行ってよかったです。さっきの枝分かれの絵もそうですけど、子供の話に差し挟む岩井さんのひとことかとか、ピックアップの仕方がいいんですよね。どういう流れでそういう話題になったかは忘れましたけど、岩井さんが「じゃあ僕は小学何十何年生っていうことだね」と返していて、他愛ないひとことなんですけど、そういう返しをパッとできることが、結局は岩井さんの作

# HIDEKI NODA×MIRAI M ORIYAMA×HIDETO IWAI

家性を表しているし、そうやってハイパイの作品はできているんだなと思ったりしました。

## 子供の発想の飛躍とご都合主義の効能

野田　……俺は小学何十何年生なんだろう？　それはともかく（笑）、子供の考えることには飛躍と破綻もあるけど、ご都合主義もあるよね。さんざん「死んだ」と言っていたのに、いきなり「実は生きていましたー！」とか。それがおもしろいというか、やっぱりそういうところで苦しみたいよね、大人は。

岩井　苦しみたい……のかな。まったく伏線がなかったのにこんな展開になりました、というのをどうするかが今回の肝のひとつではあるので、確かにそうかもしれませんね。ただ僕は、苦しいのは自分の劇団でつくっている時も充分に苦しくて、新作をつくるのは、劇団だろうが外の仕事だろうがすごく苦手なんです。この子供企画をやりたいという動機は、劇団の作品だとどうしても自分の身のまわりの話が多くなって、そういうことばっかり書いていくのはどこか偏っていて不健康なことだと思っていて。

森山　さんざん自分の体験を芝居にしていて、何をいまさら（笑）。

野田　岩井くんがそこをやらなかったら何をやるの？（笑）

岩井　そうなんですよ（笑）。これだけやっておいて何を言っているんだって話ですし、これからは他人を取材して書いていく機会をもっと増やしていくつもりですし、現実に起きている出来事にはずば抜けておもしろいことも確かにあって魅力的なんですけど、それに頼り過ぎていたらマズいという感覚は、僕の中にあるんですね。だから、もっと（自分の想定できる世界から）大きく外れたいという感覚がどこかにあって、それを１番強烈に発揮するのは誰だろうと考えたら、子供なんですよね。「子供が書いた話を芝居にする」と決めたら、それがどんなに理不尽でも諦めがつくじゃないですか（笑）。この企画を始めたのには、そういう理由もありますね。不純でごめんなさいね。

森山　いや、不純じゃないし、わかりますよ。

岩井　これまでいろんな地域の劇場で、地元の人を対象にワークショップをやってきて、参加してくれた人全員に自分の人生のどこかを芝居にしてもらう『ワレワレのモロモロ』というシリーズをつくっているんですね。自分には遠いところに存在する人の人生を、演劇として見られるものにするということが、すごくおもしろい。本人にとっても「自分は苦しんできたけど、笑ってもらえて楽になった」という手応えもあるみたいで。そのワークショップの反響が今回の企画と繋がっている気がしています。

野田　ワークショップの１回目から手応えがあったならすごいじゃない。

岩井　丸くなって座って、ひとり１つセンテンスを言って、それで強引に話をつくっていくのも意外とスムーズにできましたね。紙を渡して「書ける人だけでいいから、何かお話を書いて」と言ったら、びっしり書いて提出する子もいましたし。

野田　ワークショップは幼稚園児はダメなの？　４歳ぐらいに短い文章を書かせたら、意外と使えるということはない？

岩井　混ぜ込むのはいいですね。１回目のワークショップの形が固定ではなくて、それを元にいろんな場所でいろんな内容のワークショップをしようと思っています。……いろんな場所と言っても、基本、豊島区ですけど、たくさんの子供に参加してほしいと思います。

野田　何新聞だったかな、昔、詩人の川崎洋さんが、購読者から送られてきた小さな子供の言葉を選んで載せるコーナーがあって、やっぱり大人とはまったく違う視線で物事を観ているから、出てくる言葉が新鮮なんだよね。確かそれをまとめた本も出版されたと思う。もしワークショップだけでは（素材が）足りない時は、もっと小さい子供の飛躍した言葉を使うと刺激になると思うよ。

岩井　そういう外し方はおもしろいかもしれませんね。あと、僕はプレイヤーとして未來くんがすごく好きなので、未來くんが出演してくれるのは今回の大きいモチベーションになっていますね。

野田　ビジュアルがここ（森山）に託されるわけでしょ、ポジティブなビジュアルはこっち担当（笑）。

岩井　そうそう！　ネガティブは僕が受け持ちますから（笑）。

## こういう企画だからこそ、腕の立つ人を

森山　僕が岩井さんに声をかけられて一緒にやりたいと思ったのは、イスラエルかぶれみたいな発言になってしまいますけど（笑）、街を歩いていても、レストランでも、公共の場所にいても、子供や老人に接する時の人間の親密度が日本とまったく違って、すごく温かいんですよ。インバル（森山がダンスを学んだカンパニーの主宰者で世界的振付家のインバル・ピント）のクリエイションの場も、メンバーの子供がそこらへんを走り回っていても大丈夫だったりする。

野田　海外はそのあたりがオープンだよね。

森山　もちろんイスラエルでも現場によるし、どこでも常に子供オッケーというわけではないんですけど、経験してみて、それぐらいのメンタリティで過ごすことが、自分がオープンでいられることの要素のひとつだなと思ったんです。ここは東京だから、特にそこが希薄なのかもしれませんけど、子供と大人の距離があまりに離れているのが僕はすごくいやで、自分が家族と暮らす場所としても、もう少し変わってくれたらいいと思っているんです。すごく遠い取っ掛かりかもしれませんけど、こういう企画をやることは、それにつながる可能性はあるなと感じています。

野田　そうして行きたいね。

森山　だから、できるだけ小さな子も観られる公演になったらうれしいと個人的には思っています。いい芸術に触れるのに年齢は関係ないけど、やっぱり早い時期にできたらそのほうがいいと思うので。

岩井　未來くんは忘れてましたけど（笑）、最初に食事をした時に、そういう話をしてくれたんですよ。それを聞いて僕は「本当にそうだな」と思って。普段は「自分の劇団にたくさんお客さんが入ればいい」ぐらいしか考えないし、もしそういうことが実現するとしても日本では何十年かかるかわからない、だったら考えないようにしようとフタをしていたところがあるんです。今回、野田さんにやっていいよと言ってもらって、じゃあどこから手をつけようかと考えていた時に、たまたま未來君と話ができて「あ、この人だ！」と思ったんですよね。どういう作品にする、どういう役をやるという具体的なところ以外の、言葉が堅いですけど、志というか、そういうものを持っている人だったので。この企画はきっと、そういう人とやるのがいいだろうという感覚がすごくありました。教育的なことはまったく考えていませんけど（笑）。

森山　僕も考えていません（笑）。

野田　とりあえず教育的なことは考えなくていいよ。でも「子供から大人まで観られる」と言った時に、子供というのは何歳からにするかは考えないとだけど。

森山　それと、大人も子供も観られるもの、ということを考えると、大人向けの作品以上に視覚的なものとか聴覚的なものが大事になりますよね。そういうところで飽きさせないように工夫しないと。

岩井　うちの娘は小学３年生になるけど、舞台を観ていて１時間40分超えたあたりから「うう〜〜ん！」みたいな。

森山　１時間40分過ぎだったら僕もなりますよ。

野田　俺だってなるよ！

岩井　それと、なぜかはわからないんですけど、劇作家候補みたいな子がここから出てくるイメージがあるんです。

野田　ずいぶん気が早いね。

岩井　でも、自分のアイデアが舞台になって、大人達によって上演されるって、自分のつくった曲がプロのミュージシャンの演奏で配信されるのとほとんど同じ意味ですから。子供の時にそんな経験をするってとんでもないことで、大きな経験になると思う。だから、自由度の高いワークショップはやりつつ、その一方でもうちょっとしっかり書くコースができたらいいなと思っています。

野田　あ、今、思い出した！　こういうやり方があるんだよ。例えば「朝起きた時にどんな感じがしますか？」「芝生の上を歩くのはどんな感じですか？」「今１番見たいものは？」というふうにパラパラの質問をして、答えを集めてつなげると、すごくイメージの豊かな詩になっていくんだよ。つまり、道理というのは、受け取る側が勝手に見つけてくれるというか、その間にある飛躍を埋めてくれるんだよな。

岩井　それは楽だなー。そこで集まったものを未來くんに渡せばいいんだ、「これに動きをつけて」って（笑）。

森山　おっと（笑）。

岩井　さっき話したように、オムニバスっぽい話になる場合も手を加えたくはないですけど、詩みたいなものにするとしたら、それはもう100%、子供から出てきた言葉をそのまま使いますね。一言一句変えちゃ駄目で、美術やら照明やらは、こっちがなんとかするので。こっちというのは、未來くんですけど。

森山　（笑）

岩井　僕は本当に色彩感覚とか構図とか、苦手ですから。

野田　それ、２つ並べればいいんじゃない？　色彩感覚ダメな国と、得意な国とかっていう分け方で。

森山　おもしろいですね。ファンタジーになる。

野田　僕もロンドンかぶれで言うけど、クリスマスシーズンになると、ロンドンのウエストエンドのあちこちの劇場で「子供のための〜」という芝居がパーッとかかるわけ。バレエの『くるみ割り人形』なんかもそうだけど、それを小さな頃から観るのが当たり前というか、年中行事として根付いている。ああいうことを１年に１回経験しているのといないのでは、その後の演劇に対する感覚が全然違うよね。それにはやっぱりちゃんと腕のある人が、子供の前で芝居をしないといけないんだけど。そこはとても大切で、その意味ではこのふたりがやってくれるのはありがたいし、頼もしい。観客として――言い出しっぺだけど関わらないので（笑）――楽しみで、早く観たいですよ。

モデレーター・文：徳永京子
写真：平岩 享

### 今回のアイタイヒト

**森山未來 MIRAI MORIYAMA**

**もりやま・みらい**　数々の舞台・映画・ドラマに出演する一方、近年ではダンス作品にも積極的に参加。文化庁文化交流使として13年秋より1年間イスラエルに滞在、インバル・ピント&アヴシャロム・ポラック ダンスカンパニーを拠点に活動。待機作として、8月に直島・ベネッセハウスミュージアムにて岡田利規×森山未來「In a Silent Way」（『瀬戸内国際芸術祭 2016』に参加）、李相日監督作品、映画「怒り」（東宝系にて今秋公開）など。第10回日本ダンスフォーラム賞2015受賞。

**岩井秀人 HIDETO IWAI**

**いわい・ひでと**　劇作家・演出家・俳優。2003 年ハイパイを結成。2007年より青年団演出部に所属。東京であり東京でない小金井の持つ「大衆の流行やムーブメントを憧れつつ引いて眺める目線」を武器に、家族、引きこもり、集団と個人、個人の自意識の渦、等々についての描写を続けている。作品は韓国、イギリスで翻訳上演され、国内外から注目を集めている。2012年NHKBSプレミアムドラマ「生むと生まれるそれからのこと」で第30回向田邦子賞、2013年「ある女」で第57回岸田國士戯曲賞を受賞。

**野田秀樹 HIDEKI NODA**

**のだ・ひでき**　1955年、長崎県生まれ。劇作家・演出家・役者。東京芸術劇場芸術監督、多摩美術大学教授。東京大学在学中に「劇団 夢の遊眠社」を結成。92年劇団解散後、ロンドンへ留学。帰国後の93年に演劇企画製作会社「NODA・MAP」を設立。以来『キル』『赤鬼』『バンドラの鐘』『THE BEE』『ザ・キャラクター』『エッグ』『MIWA』などの話題作を発表。歌舞伎『野田版 研辰の討たれ』などで、故中村勘三郎丈と組み、好評を博した。国内のみならず海外でも精力的な創作活動を展開。15年11月、モーツァルト歌劇『フィガロの結婚〜庭師は見た！〜』を演出、全国10カ所で上演。16年1月〜4月NODA・MAP最新作『逆鱗』を上演。

**「コドモ発射プロジェクト」未来の大人と演劇はじめました（仮称）**

演出：岩井秀人　出演：森山未來 ほか

子供たちのアイディア収集やワークショップなどを経て、2017年2〜3月にシアターウエストで上演予定。詳細は後日発表。